

目次

Contents

《Featuring News》—注目のニュース—

- 3~6 ◆ 福岡歯科大学・福岡看護大学・福岡医療短期大学
 新生・保護者の皆様へのメッセージ

《Campus News》—学園の話題—

- 7~8 ◆ 福岡歯科大学 口腔歯学部卒業式・大学院修了式
 - ◆ 第113回歯科医師国家試験結果
 - ◆ 福岡医療短期大学 卒業式・専攻科修了式
 - ◆ 第29回歯科衛生士・第32回介護福祉士国家試験結果
- 9 ◆ 慶熙大 学校歯科大学 学生訪問団が来学
 - ◆ 福岡看護大学が校舎を増築
- 10 ◆ ヨット部が福岡市ならびに福岡市スポーツ協会から表彰
 - ◆ 福岡市歯科医師会、上海交通大学より防護服等の医療物資を寄贈いただきました

《People》—学園の「ひと」—

- 11~13 ◆ 福岡医療短期大学長に田口智章氏が就任
 - ◆ 北村憲司氏(前福岡医療短期大学長)がご退任
 - ◆ 福岡看護大学長に窪田恵子氏が再任
 - ◆ 新役員・役職教員等の紹介
 - ◆ 教員紹介
 - ◆ 福岡歯科大学 学生後援会会長改選
 - ◆ 福岡歯科大学 客員教員・臨床教員紹介
 - ◆ 定年を迎えて

《Events》—学園行事レポート—

- 14 ◆ 「卒業生が選ぶベストサブノート賞」が授与されました!

《From Alumni》—同窓会だより—

- 15 ◆ 学術報告(重松 久幹・8期生)
 - ◆ 同窓生からの手紙(吉永 修・4期生)
- 16 ◆ クリニックからこんにちは!(荒金 慶子・27期生)
 - ◆ 卒業生NOW(田代 剛・26期生)

《Affluent Voices》—みんなの声—

- 17 ◆ 看護大学だより
 - ◆ 短大Voices
- 18 ◆ 学生からのメッセージ(大城 裕太郎・福岡歯科大学 第6学年)
 - ◆ 保護者からのメッセージ(筑紫 寿七生・福岡歯科大学 学生後援会理事・評議員)
 - ◆ コラム
 - ◆ 編集後記

《Information》

- 裏表紙 ◆ オープンキャンパスのお知らせ
 - ◆ 「学校法人福岡学園・福岡歯科大学 創立50周年記念募金」実績報告

《表紙写真》学園内に咲き誇るつつじ

私の根幹を育ててくれた方との出会い

福岡医療短期大学 歯科衛生学科学科長 堀部 晴美

東京を離れ、福岡に住み40数年が経った。同様に歯科衛生士となり40数年が経過した。振り返ると様々な人との出会いがあり、現在の自分がある。

初めは看護師を志望したが、父から歯科衛生士を勧められた。受験生から「小さい頃、歯医者さんで優しい歯科衛生士のお姉さんに出会ったことがきっかけで志望した」と面接の際によく聞くフレーズであるが、そのような記憶は私にはない。治療を嫌がり暴れたため、診療台にサラシで巻かれ、誰も助けに来てくれなかったという記憶しかない。歯科衛生士という職種をよく理解しないまま、歯科衛生士学校に入学した訳であるが、ここで出会った校長先生が、「米国の歯科衛生士は開業し、歯科衛生業務を行っている。近い将来、日本も同様になる。」という話をしてくれた。そのような日が来るという夢を信じて2年間の学生生活を終えたが、日本での実現はなかなか難しいものであった。卒業後、福岡歯科大学附属病院の補綴科に就職した。そこで出会ったのは若い女性の患者さんで、口腔内は歯の動揺と歯肉からの出血がみられ、補綴処置を行う前処置としてスケーリングと保健指導を主治医から指示された。1年目の未熟な技術ではあったと思うが、歯の動揺も治まり歯肉の状態も回復した。この時、自分の技術が患者さんの口腔内に現れることを経験した。その後、専門学校から短大の教員となって数年経ち、歯科衛生士に限界を感じた頃、緩和ケア病棟における口腔ケア研修期間中に終末期を迎えた40代の女性に出会った。1週間の病棟研修中、セデーションが施された状態で口腔ケアを行って3日後、ケアの途中にその方は目を覚まされた。開口二番、口にされた言葉は「早く元気になりたい」とい。告知を受け、余命もご存じの方から発せられた「元気になりたい」という言葉はとても衝撃的であった。研修が終了した後、元氣になられご自分で歯磨きをされるまで回復したが、残念ながら数か月後に亡くなられた。

あとで聞いたところによると、その方は研修期間中に亡くなると余命宣告されていた方であったとのこと。当時、仕事に限界を感じていた私にとって、「歯科衛生士で捨てたものじゃない!」という気持ちにさせてくれた出会いであった。

歯科衛生士になりたての頃、「仕事は何をしているのか」と問われ、「歯科衛生士」と答えると、「どこの製紙会社か」と聞き返された。まだまだ、社会的に認知度が低い歯科衛生士ではあるが、この3人の方々の出会いを根幹に、歯科衛生士は命に係わる職種であることに誇りを持ち、学生に感動を与え、育てることが使命であると感じている。

新しい年度を迎え、本来であれば落ち着きを取り戻した時期であるが、今年新型コロナウイルスの感染症対策に追われる日々からの幕開けとなった。事態が早く終息することを願うばかりである。